



しゃくなげ

長崎県社会教育主事等連絡協議会

会報 第49号

ご挨拶

長崎県
社会教育主事等連絡協議会

会長 岡野 俊作

令和5年度長崎県社会教育主事等連絡協議会総会決議を経て、会長を拝命することになりました。

新型コロナウイルス感染症も季節性感染症の5類へ移行されコロナ禍前の状態に戻り、社会教育の活動が戻ってきました。

しかしながら、過疎化・高齢化など地域の疲弊が進む中で、事業推進は、今まで以上の工夫やアイデアが必要になるかと思っています。

さて、本協会の目的は人づくり・まちづくりを大きな柱とする社会教育の振興・充実にさらに進めるべく、一人ひとりがそれぞれの市町で努力、本県社会教育の振興を目指すことです。

これに基づき、各市町におかれましては職員の資質向上に努められ、社会教育の振興にご尽力いただいておりますことに敬意を表します。

また、長崎県教育庁生涯学習課と共催で7月に開催しました、研修会におきましては「草社の会」の武次様には「高齢者の社会教育活動について」をテーマに、地域とのつながりの大切さや、参加者のことを考えた講座の開催など笑いあふれる講演をいただきました。誰もが高齢を迎えますが、講演いただいたことを自分なりに活かしていけたらと思います。

さて、令和5年度社会教育主事講習の現地研修が南島原市で開催され、12人の受講生をお迎えすることができました。

現地研修のテーマを「人と地域がつながる社会教育の実践へ」とし、南島原市で社会教育を実践されている方々に講師をお願いしたところです。

「廃校を活用した芸術文化の振興」をテーマに、「アートビレッジ・シラキノ」エデュケーターの池田さん、「スポーツ団体との連携」をテーマに、幼児期からのコーディネーション・トレーニングに取組む、総合型地域スポーツクラブ「ひまわりの中島・中村さん」、「社会教育の役割」をテーマに認知症予防等について活動されているボランティア団体「ささえさんの会」代表の塩田さん、「ふるさと教育」をテーマに自然体験事業に取り組んでいるB&G海洋センター指導員小田・小関さんが、それぞれの活動実績と活動に対する思いについてお話をいただきました。

受講生からは、取り組みの

詳細や課題に対して多くの質問が有り、お互いに学びのあ
る充実した三日間でした。

このような機会をいただき
ました九州大学並びに長崎県
の関係者の皆様、誠にありが
とうございました。

また、講師の皆様が、それ
ぞれの立場で地域の人たちと
つながりながら、活動されて
いることを知るとともに、主
事講習に携わった多くの人た
ちがつながった良い研修とな
りました。

社会教育を実践される皆様
の活動が持続可能なものにな
るよう、行政のサポートの必
要性を強く感じたところです。
結びになりますが、多様化
する社会環境のなかで、社会
教育並びに生涯学習の在り方
を充分に考え、取り組んでい
くことの必要性を改めて感じ
ているところでございます。
また、これからの地域社会
がもとめる「ウェルビーイン

グの向上」を目指した社会教
育の可能性について皆様とと
もに学び、実践できればと思
います。

社会教育の「ほっとけん」

長崎県教育庁生涯学習課

課長 加藤盛彦

「社会教育ってなんだろう？」
はじめて社会教育の業務に
携わる中、日々沸き起こる疑
問です。法の定義は分かるが、
まだまだ自分の言葉で表現で
きず、もどかしい状態ではあ
りますが、今、社会教育行政
について考えていることを記
します。

一 成功の鍵は、社会教育

この一年、様々な場で、「社
会教育の衰退」「社会教育が見
えない」など今後を危ぶむ声
を耳にしてきました。一方、

県内各地で社会教育を力強く
実践しておられる方と数多く
お会いすることができました。
例えば、地域に溶け込み創意
溢れる実践を重ねておられる
教育委員会や公民館の若手職
員の方々。会員数の減少が続
く中であっても高い志のもと
活動を推進される社会教育関
係団体の方々。かつて社会教
育に携わった経験を生かし、
ライフワークとして元気に活
躍される先輩方。これからの
まちづくりとして新たな風を
吹かせておられる方々。いず
れも熱意と希望をもって社会
教育を実践されており、その
姿は魅力に溢れ、豊かな人生
を歩んでおられることが伝わ
ってきました。

また、先日、自治体の職員
研修に参加しました。講師の
先生が、「多くの部署で地域づ
くりを進めているが、成功の
鍵を握るのは、社会教育であ
る。」と話されました。住民が

主体的に学び、自分たちの手
で生活や地域を変えていこう
としなければ地域づくりは頓
挫する、という話を聞きなが
ら、改めて、社会教育の重要
性を感じました。

二 学校教育と社会教育

社会教育の研修会の中で、
学校教育への不満が語られる
場面に出会うことがあります。
た。両者を比較するうちにい
つの間にか相いれない存在に
なっている印象を受けました。
これまで学校教育の仕事に携
わってきたため申し訳なさを
感じながらも、それぞれの理
解不足、捉え違いという部分
も少なくない気がしています。
両者に違いはあるものの、根
幹的な部分は深く重なってい
ます。「学社融合」が叫ばれて
久しいですが、時代の進展と
ともに両者の融合する部分が
大きく膨らんでいるという認
識も必要だと思えます。

例えば、本県の学校教育が重点施策の一つに掲げるふるさと教育には、子どもたちが、地域を探索し、課題を発見し、「ほっとけん」と動き出す有名な学習プログラムがあります。この「ほっとけん」と動く子どもたちの姿は、社会教育の実践家そのものなのです。

三 私の「ほっとけん」

生涯学習課で、社会教育の世界を一年間探検し、私なりに「ほっとけん」と思うことがあります。その一つは、これまで行政が施策として地域にお願いしてきた内容が地域に堆積し溢れかえっていないかということです。「地域にはいくつも同じような会議があるが、参加者はいつも同じ。それだけで疲弊する。」という指摘を各方面からいただきました。このことは喫緊の課題であり、改善にはそれぞれの地域において対話を重ね実態に

即した見直しを進めることが肝要であります。行政の立場から地域における会議や組織の見直しを積極的且つ横断的に呼びかけ、後押ししなければならぬと思うのです。県社会教育委員の会議でのご意見を紹介いたします。

「多世代・多分野の人々や団体が子育てやまちづくりに関わるうえで、必要なものを残し不要なものをそぎ落とすことで、個人が輝き、そのことによって人がつながる。」

社会教育を推進される皆様と共有し、今後の改善につなげていきたいと思った言葉でした。

社会教育一年生の私が、あれこれ述べてすみません。今後とも皆様と共に歩ませていただくことをお願いいたします。



活動報告

長崎県社会教育支援

「草社の会」

副会長・事務局長 武次 寛

平成23年5月、県下各地から社会教育を愛する者、長崎県の社会教育の現状に危惧の念を抱く者が集い、本会を結成しました。

会の名称については、雑草のように力強く、地域という大地にしっかりと根を張り、社会教育を広げていきたいという思いから「草社(そうしゃ)の会(かい)」としました。

現在、県内外に110名の会員がいます。

私たちは、本会設立趣旨を踏まえ、市町の社会教育担当者、学校教育関係者、まちづくり行政関係者、多様な市民活動等と協働しながら、長崎県社会教育の振興を通して、

「元氣なふるさとづくり」を目指しています。

目的達成のために、
・会員の研修
・各種研修会及び講習会等の支援

・社会教育の調査研究・資料編纂・情報提供

その他、必要事業を掲げて活動を進めています。
令和5年度においての主な活動は、次のとおりです。

「研修会・フォーラム」

春季 研修会 (総会終了後)

会員40名が参加して、実践2事例とフリートークキングを行いました。

実践2事例は、「長崎伝統野菜育成保存会」と「口之津町のボランティアグループささえさんの会」が発表しました。

秋季 研修会 (9月末)

川棚町教委の共催を得て、「ワクワク!ドキドキ!仲間

佐世保市教委、佐世保市社
教委員有志の会等の共催によ
り「地域づくり・人づくり・つ
ながりづくりフォーラム」

冬季 研修会 (12月初め)

づくり交流会 in かわたな」と
称して、町内外から60名参加
し、川棚町中央公民館で開催。
研修内容は、町内の活動グル
ープによる実践事例発表(3
事例)とホッケー体験等の親
しみあふれる研修会ができた。
川棚町は女性の活動が
めざましい町であることを実
感しました。



社会教育フォーラム in 佐世
保として開催。市内外の社
会教育及び学校教育等関係
者など106名が参加しまし
た。
このフォーラムは、多様な
学習方法(講演・ポスターセ
ッションほか)を駆使して行
ったので「実り多い研修会だ
った」という声が多かったよ
うです。
また、社教主事等連絡協の
県央ブロック研修会も従来か
ら共催事業として行っていま
す。



今後の研修会は、まだ実施
していない離島地域の市町教
委との研修企画を行いたいと
思っています。

- ・「県市町教委や各種団体等
の要請に応える講師派遣」
- ・「役員会議の毎月開催」
- ・「会報の発行」(4回発行)
- ・長崎SDGスクラブ賛助会
員、県社会教育主事等連絡
協議会加入を継続していま
す。

本会はこれまで13年活動
してきました。お陰で会員数
も増え、これからの更なる進
展をめざしていますが、まだ
まだ課題も多く、一歩ずつ慌
てず確かな活動にしていきた
いと考えています。

各地区ブロックだより

長崎・西海・西彼ブロック

(長崎市・西海市・長与町・時津町)

「長崎市PTAスマイル」
みらいふえすた」について

長崎市教育委員会
生涯学習企画課 和泉 栄二

長崎市PTA連合会(以下
「市P連」と表記)と共催に
よって取り組みました「長崎
市PTAスマイル」みらいふ
えすた」について報告いたし
ます。

このイベントは、市P連が
例年開催していた「長崎市P
TA大運動会」「長崎市PTA
研究大会」を統合し、新たな
市P連の一大イベントとして、
昨年度より開催しています。

今年度は第2回となり、12月16日(土)長崎ブリックホールにて実施いたしました。

このイベントを開催するにあたっては、市P連の専門委員会の一つである「つながろう委員会」が主体となつて企画を運営しました。定例会としての打合せは五月より八回実施し、スローガンを「ワクワクいっぱい！学んで遊んで、To naga ROAD (つ・なが・ろう)」として、市P連本部、事務局と併せて、教育委員会からは本課より担当者が必ず参加しました。個別ミーティング、会場下見、出演者との打ち合わせ等を併せながら、着々と準備を進めました。

昨年度の第一回の実践や反省を生かし、ホールのステージイベントでは前回好評だった「小学生と市長・教育長のトークイベント」を今回は中学生で実施すること、講演会は子育ての悩みを共有できる

内容とするために、大村共立病院長の宮田雄吾氏をお招きすることに決まりました。屋内ブースでは、前回同様に市P連OBサポート会等によるミニイベント、(株)チョーコーによる物品販売に加え、今回新たに長崎市教育研究所の「お悩み相談室」、そして(株)ゼンリンによる防災教育教室、各コーナーが加わり、屋外では五店舗がキッチンカー等で出店となりました。

実際のイベントにおいて、「中学生と市長・教育長とのトークイベント」では市内四名の中学生が登壇し、長崎市の将来についての熱い思いを市長・教育長と意見を交流し、聴衆の関心をグッと引き寄せ、頼もしさと長崎市の明るい未来を感じられました。また、宮田氏による講話は「ゲームにはまる子どもへの接し方」叱り方を工夫してみよう」という演題のもと、スマホや

メディアに関わる問題から子育てに通じる悩みの解消法等をお話いただきました。各ブースも盛況で、にぎやかな雰囲気醸し出されていました。イベント終了後は多くのスタッフがやり遂げた喜びを感じ合いました。

市P連がこのイベントを開催した目的としては、PTAをより身近に感じてもらう「PTAって楽しい」「PTAって必要だ」と感じてもらうためでした。市内小中学校の単位PTAへチラシ周知に加え、長崎市広報紙「広報なごさき」や長崎市公式LINEにて開催を呼びかけ、一般市民への周知も図りました。お陰で前回よりも入場者の増加につながり、やや下降気味と感じていたPTAへの認知度も上昇した感じを受けました。市P連は長きにわたり活動が続けて様々な役割を果たしてきましたが、社会の変化に

合わせてそのあり方を変える転換点を迎えています。子どもや子育てを中心にしたこのイベントの成功を糧に、更にPTAを進化させられるよう、今後もPTA支援に努めてまいります。



東彼ブロック

(東彼杵町・川棚町・波佐見町)

「ふるさとについて考える」

波佐見町教育委員会

社会教育班 馬場 真琴

波佐見町では、地場産業である「やきもの」を活かした郷土愛の醸成と町の魅力を直

に感じ取ってもらうため、波佐見中学校生徒を対象に「やさみの文化体験」を実施しています。

波佐見町に生まれ育っても、なかなか具体的な波佐見焼に触れる機会はありません。実際の波佐見焼の製造工程は、他のやさみの産地と違い、一つ一つの工程をそれぞれのプロが担う「分業制(型屋、生地屋、窯元、商社)」で作られています。

この事業は、「どのような作業が行われているのか」「他の地域のやさみのづくりとどう違うのか」、実際に製造工程を体験、見学することにより、知識を深め、波佐見町独自のやさみのづくりへの興味を持つ子どもたちを一人でも増やし、将来の就業先としての選択肢としてもらうとともに、地域や産業の担い手となる子どもたちの育成を目的としています。

主な事業内容ですが、1年生・2年生・3年生でそれぞれカリキュラムを設けています。まず、1年生では、波佐見焼に関して基礎的なことを学びます。波佐見焼の歴史や製造工程に関する講話に始まり、現場のプロ(職人)の技の見学と体験、実際の製造現場への潜入、そして自分たちで絵付けを行い、その作品を国史跡である登窯跡で焼成する体験を行います。2年生では、仕事としての波佐見焼を知るため、波佐見焼に関する仕事に携わっている人たちに、仕事の大変さ・楽しさ・やりがいなどを聞いて、意見交換を行うトークセッションと町内の様々な企業・事業所での職場体験を行います。3年生では、1・2年生の学んだことの集大成として、波佐見町のために自分たちに何ができるのかを考えるため、町長や町内の様々な職種の人たちに町

の課題や魅力について話を聞き、波佐見町にとって必要なことについて、自分たちの意見を述べ、意見交換を行うトークセッションを実施します。最終的に、そのトークセッションを踏まえて、町への施策提案を町議会の議場で実施します。

この事業を通じ、全国でも人気上昇中の波佐見焼の魅力とできるまでの過程を学び、町の多くの人たちとの意見交換をしながら、自分ごととして町のことや産業のことを考えてみる。この学びから、自分たちが生まれ育った波佐見町のことを深く知り、好きになり、多くの人たちに自分の住む町の素晴らしさを自慢できる子どもたちを育成していければと考えています。

平戸・松浦ブロック

(平戸市・松浦市)

平戸市教育委員会

生涯学習課 松瀬 一博

平戸市は、平成19年度に県内唯一の「生涯学習都市宣言」を行い、1期を5年間とする「生涯学習推進計画」に基づき、市全体での生涯学習活動を推進しているところです。

この計画の中では、市民の「生涯学習活動」をまちづくりにつなげる「あらゆる学習活動」と捉え、人々の学習の成果を活かしたまちづくりを進めていく必要があるとの考えのもと、さまざまな施策を展開するよう図っています。ここでは、基本目標の一つである『人材育成』の中で、学びの成果が活かされる人材育成を目指す「ひらど市民大学」について紹介します。

この「ひらど市民大学」は、市民に様々な分野における専門家を講師とした学習の機会を提供することで、普段学ぶことが出来ない専門的な知識を得てもらい、そこに集う仲間同士の繋がりをつくり、将来的にまちづくりを先導するリーダーになってもらうことを目指して、平成30年度から実施しているところです。

大学教授などの専門家を講師とした講座を、年に8回程度実施していますが、そのうち1回は、学長である市長が講義をするスタイルとなっています。1講座1単位とし、22単位取得で修了となっており、現在受講生は累計で89名、修了者は21名となっています。

令和5年度の事例では、KIGAE株式会社の松尾匡悟先生に、「新たな視点の資産活用」と題した、波佐見焼の卸業者と窯元が一緒になって行って

いる、環境問題解決に向けた取り組みについての講義や、市内ボランティアガイドの田中まき子先生による「平戸市における戦争遺構」についての講義など、民間や地元の専門家を講師として招いた講義も実施し、受講生に大変好評でした。

受講生の多くが高齢者であり、なかなかリーダー育成には直接的につながらないとい

う課題もありますが、今後につきましても、長崎県立大などとの連携で専門性をさらに深め、民間や地元の専門家を掘り起こして講義のメニューを組み立て、少しずつでも人材育成に繋がりたいと考えています。

生涯学習だより
まなぶ君
学んでみよう そこには 新しいあなたと まちがらみ

臨時号
令和5年8月15日発行
編集・発行：生涯学習だより編集委員会
ひらど市民大学運営委員会

ひらど市民大学

受講生募集

募集締切：8月22日(火)まで!!
※締切後も定員に達するまでは申し込みを受け付けます。
 ※定員に達した場合は抽選となります。

「ひらど市民大学」開講!!

定員
 80名

対象
 高校生(16歳)以上の市民

期間
 令和5年8月～
 令和6年2月

主会場
 田平町民センター

主 催：平戸市教育委員会 主 管：ひらど市民大学運営委員会

五島・新上五島町ブロック

(五島市・新上五島町)

「五島市中学生国内体験学習」を終えて

五島市教育委員会

教育総務課 松崎 重樹

子ども達の将来への夢・あこがれの実現に向け、世界を代表する都市「大阪」を実感できる施設や職場の見学、そしてそこに関わっている人々との交流を通じて、主体的に進路を選択する能力や態度を養うという目的のもと、中学1年生20名で8月21日から24日の3泊4日の日程で国内体験学習を実施しました。

本事業は、新型コロナウイルス感染症の影響により4年ぶりの開催となりましたが、大都市であり、更に2年後に迫った万博開催の機運が高ま

る大阪で、見学・研修・学習ができたことは子ども達にとって大変良い刺激を受けたのではないかと思います。

体験学習のひとつの目玉となっている地元出身者の企業訪問では、五島市出身の方が会長を務める会社を訪問させていただきました。

会長にはお忙しい中、生徒たちのためにご講話をいただきました。講話では大阪で起業し現在に至るまでの苦労話や経験談、今の子ども達に必要なこと、また外から見た郷土「五島」のいい所や悪い所など様々なお話をいただきました。

他にも近畿大学生との交流学习や連続テレビ小説「舞い上がれ」関連として東大阪市の町工場見学、なんばグランド花月での大阪文化の体験など、今回の体験学習は子ども達にとってどれも心に残るものとなり、学校の授業では味

わえない活きた体験になったと思います。

また本研修では、班での行動を基本とし、班ごとに決めた目標に向けて活動に組み込みました。違う学校からの参加者や男女混合の班編成であったため、当初は戸惑いや不安がありました。また、事業の趣旨や班行動の意義等を指摘すると、二日目以降は班長を中心に話し合い、男女一緒の行動ができるようになりました。その要因として、その日の終わりに反省会を開き、反省を基に目標をつくって班員全員で情報共有できたことで、翌日の活動に意識して取り組めたのではないかと思います。子ども達の成長を感じました。

今回の体験学習で得たこと・学んだこと・反省などを活かして、生徒自身の今後の学校生活や進路決定につなげてほしいと切に願います。

事後の保護者アンケートに

おきましても、多くの方から子どもの成長に関する感想を頂きました。青少年健全育成の面からも物事を考える視野をさらに広げることができるとも体験学習として、これからも継続していきたいと考えております。

また、現代社会においてもグローバル社会が進み様々な分野で国や地域を越えた交流が多くなっています。中学生が今後の進路・職業選択を行う上で、国外の状況を肌で感じ体験できるキャリア教育を目指し、「国外体験学習」を加えた事業も進めていく予定です。



吉岐・対馬ブロック

(吉岐市・対馬市)

吉岐市教育委員会

社会教育課 古賀 一典

吉岐市社会教育委員会に対して令和5年10月17日、「これからの中学校部活動の在るべき姿」について諮問しました。諮問理由は「国や県は令和7年度から、中学校の部活動の指導を学校から地域に移行することとしており、本市の中学校の部活動の在り方について、意見を頂きたい。」ということです。今回は、中学校部活動の地域移行に伴う課題を洗い出し、それぞれの課題に対して解決の方策を示すという方法で答申書にまとめました。

部活動の地域移行は、2022年6月にスポーツ庁での有識者会議で提案された休日における学校部活動を地域に



移行する部活動改革の一つです。移行先には地域のスポーツクラブやスポーツ少年団などが想定され、複数の中学校が集まることが可能となります。彦根市では、彦根スポーツ協会が受け皿となり移行を進めていきます。

国や県の考え方は、休日の学校部活動を地域に移行することからはじめ、三年間の「改革推進期間」と位置付け進めています。彦根市社会教育委員会では、休日の学校部活

動だけではなく平日も含め、その方向性を示すこととしました。

地域移行を進めるうえで彦根市の基本的な考えとして、

一、生徒にとって望ましい持続可能な部活動の機会の確保

ア、生徒の希望に合った専門的指導の受けられる環境整備

イ、生徒のニーズや実態に合った選択肢の提供

ウ、指導者の質や学校の規模等によらない持続可能な指導体制

エ、経済的理由による指導の格差を生まない制度の実現
オ、生徒の安心・安全を保障する体制及び環境整備

二、学校の働き方改革を推進し、学校教育の質の向上を目指す

ア、部活動指導を希望する教

師が指導に参画できる体制
イ、部活動指導を希望しない教師が抵抗感なく指導に従事しない体制としました。

主な答申の内容は、彦根市の中学生にとって望ましい持続可能な部活動の機会を確保するとともに、学校の働き方改革の推進による学校教育の質の向上を目的とし、中学校部活動の地域移行の在るべき姿として、

一、地域移行の目的を理解した適正な「地域の受け皿」が主体になること。

二、希望する生徒が活動できる十分な「活動場所」が確保されること。

三、希望する生徒が参加できるように「保護者の負担」の軽減が図られること。

四、生徒の心身の健全な育成のために「指導の過熱化」が防止されること。

五、保護者や地域とともに生

徒を育成するために「行政の役割」を果たすこと。

社会教育委員から6名、社会教育課から2名、計8名の原案検討委員を選び、他市や長崎県社会教育委員会の答申書を参考にしながら構成や文章表現等も考えました。何回も原案検討委員会や委員長、事務局による打合せを重ね、いろいろな意見や考え方をまとめていただき答申書をまとめることができました。委員長をはじめ、社会教育委員皆様に対して感謝とお礼を申し上げます。

令和5年度 長崎県社会教育研究大会

【大会テーマ】

「ウェルビーイング」な社会の実現を目指す
生涯学習・社会教育のあり方

分科会報告

県央ブロック

(諫早市・大村市)

【研究テーマ】

若者の地域参画について

【発表テーマ】

「英語学習放課後子ども教室」の取組について

〈指導助言者〉

長崎県教育庁

生涯学習課 朝長 千恵

〈事例発表者〉

・鎮西学院大学

経済政策学科 4年

寶子山 海

外国語学科 3年

松山 怜未

・長崎純心大学

こども教育保育学科 4年

松尾 朱莉

〈司会者〉

諫早市教育委員会

生涯学習課 山下美喜夫

〈記録者〉

大村市教育委員会

社会教育課 永井 秀和

松永 章男

〈会場責任者〉

諫早市教育委員会

生涯学習課 畑中 綾佳

【事例発表】

英語学習放課後子ども教室は、大村市中央公民館で月に1回土曜日または日曜日の午前中に、前期、後期に分けて4回ずつ、年間計8回実施している。毎月企画会議を行い、時節に応じた内容を企画し、歌や演劇、レクリエーション、工作、料理等を行っている。

「アクティビティを通して楽しく学ぶ」「使える英語を身につける」「英語の楽しさを知る」の3つをねらいとしており、企画を練る上で、目的の明確化、季節感を意識すること、体験してより深い理解につなげることに気を付けてい

る。

教室に参加して、教育と言えは学校のイメージがあったが、身の回りのあらゆる場所で教育が行われて、地域との関わりに繋がっていることに気付いた。子どもが知識として学び、アウトプットできる場の必要性を感じた。

今後は個々の子どもへの対応や、ICTをうまく活用し、更に充実した教室にしたい。就職しても、企業や学校と子ども、地域をつなげることに



意識をしていきたい。

【質疑応答】

Q 教室の対象者と男女比はどれくらいか。

A 対象者は大村市内の小学3年生から6年生の児童。児童へチラシを配り、応募があった児童が参加している。定員は20名としており、抽選することもある。男女比は年によつて異なるが、今年度は約6割強が女子、残りが男子という状況である。

Q 教室が始まった経緯、また活動に参加した経緯は。

A 小学校の英語教育必修化、教科化と、近年英語が苦手な子どもが多くなっていることを踏まえ設置した。また、活動したきっかけは、大学や成人式典での人とのつながりがあり、自分の将来ややりたいことを踏まえた上で参加した。

【研究協議】

グループワークを行い、他

市の情報共有と、若者を取り入れる方策について検討し、次のような発表があった。

- ・地域自体に若者がいないところもある。イベントを企画し、謝金、交通費など若者が参加しやすいインセンティブを付ける。また、大学と連携し、授業の一環と位置付ける。

- ・子ども会や、地域の祭りなどの企画を子どもにさせる。
- ・広報の力は大事なので、もつとボランティアの募集を広く周知する。

【指導助言】

英語は生徒間の学力が開きやすい教科であり、小・中学校での苦手意識が高校まで引き継がれ、進路の分かれ目になりうる。小学校から感覚的に理解することは、多文化社会を生きる子どもにとって大切なものの見方を養っている。また、若者が一生懸命に教室



へ携わることで、その姿を子どもが見て、将来、自分も教室のボランティアになり、教室の企画運営をしてみたいという子どももいるのではないかと思います。地域を担う次世代を若者が育てるという機会をつくるのが、今、社会教育に求められていることではないかと考える。

大学は都市部にしかないが、地域には高校がある。現在、各高校が地域と連携したい、協力したいと模索していると



ころであり、ぜひ社会教育側から、高校生の地域活動への参加をお誘いいただきたい。参加だけでなく、企画や運営に携わることで、体験だけでなく繋がりや愛着を生むことにもなる。

子どもたちが大学生と一緒に活動し、英語に興味が出て、学習にも繋がり、さらには、他の人のために私も何かしたいと気持ちが深まっていくことが、ウェルビーイングな社会の実現に繋がっていくこと

になる。この考え方をそれぞれに持ち帰っていただき、現在行っている様々な事業や活動を見直すきっかけにしたい。

佐世保北松ブロック

(佐世保市・小値賀町・佐々町)

【研究テーマ】

協働プログラムの推進

【発表テーマ】

中学校と地域の連携による子どもたちの郷土愛・地域愛の醸成

〈指導助言者〉

長崎県教育庁

生涯学習課 山下 慶子

〈事例発表者〉

佐世保市吉井地区

コミュニティセンター

社会教育推進員 鴨川志紀美

久田 訓治

〈司会者〉

佐々町教育委員会

事務局 金子 剛

〈記録者〉

小値賀町教育委員会

教育生涯学習班 大田 議嗣

〈会場責任者〉

佐々町教育委員会

社会教育班 藤田 浩紀

【事例発表】

吉井町の課題とは、都市部への若者の流出により、少子高齢化、人口減少に拍車がかかり、その結果地域産業や文化活動の後継者が不足しつつあることである。この地域課題を解決するには、若者が地元に着するため、次世代の地域の担い手である子どもたちの郷土愛、地域愛の醸成が必要なのではないかと考える。

そこで、吉井地区コミュニティセンター主催講座で、地

域課題や解決方法を地域住民とともに学び、取り組む講座「がんば吉井」を令和3年度から開始した。対象は中学1年生で、「吉井大好き子」を育むことを目的とした地域学習を行っている。初年度は、

福井洞窟・直谷城・福井洞窟ミュージアムを見学し、地域の歴史や文化・伝統、産業等について理解を深め自分の言葉で表現し、紹介・発表を行った。次年度は、地域の課題解決・活性化に向けて活動をされている吉井地区自治協議会について、どんな活動があるのかを2日間に渡って中学生に学んでもらった。1日目は、学習の目的やスケジュールを説明した後、役員の方々から自治協議会の組織や事業内容、コミュニティセンターと自治協議会の関わりについて説明を受けた。2日目は、自治協議会、各部会長と6グループに分かれて約20分の

ワークショップを行った。初めは、少し緊張した様子だったが、事前に質問等をまとめていたおかげもあり、どのグループも和気あいあいと楽しそうに過ごしていた。

今後は、「吉井大好き子」を目標に、中学1年生に地域の為に活動をされている方々についての学習を行い、地域への興味や関心につながるよう企画していきたい。前年度、「がんば吉井」に取り組んだ中学2年生には、地域について学習したことにより芽生えた地域愛をより一層育む為に、地域行事の運営にボランティアスタッフとして実際に関わってもらおうと計画している。協力してくれる中学生がボランティアスタッフとして地域の方々と一緒に活動すること、子どもたちが地域と関わっていく環境が整っていく、更に毎年継続していくことで、郷土愛・地域愛の醸

成、次世代の担い手の育成につながつていくものと考えている。

【質疑応答】

Q これはコミュニティ・スクールの一環か？

A また別角度の取組。中学校長の地域学習への想いがきっかけ。

Q 小学生からの取組も重要では？

A 実は小学生の方が進んでいる。福井洞窟の活用が特徴。

Q 自治会で行事をやるにしても中学生はほとんど参加しない。吉井はどうか？

A 「がんば吉井」の子は文化祭にボランティアで入っている。保護者や学校にも何度も参加呼びかけをアタックしている。

【研究討議】

参加者が4班に分かれてグループ討議を行った。各班とも自分の地域の実情や課題の

共有、郷土愛の重要性について熟議を深めた。

【指導助言】

重要なのはつながり続けていくこと。人とつながることはウェルビーイングの5要素のうち2つを占める。社会教育として、コロナに負けず人とつながり続けていくことを大切にしてほしい。



島原半島ブロック

(島原市・雲仙市・南島原市)

【研究テーマ】

多世代・多分野が関わる活動の推進

【発表テーマ】

子どもを核とした地域

課題解決の取組

〈指導助言者〉

長崎県教育庁

生涯学習課 大町 正博

〈事例発表者〉

雲仙市教育委員会

生涯学習課 中島泰二郎

小林 優己

〈司会者〉

島原市教育委員会

社会教育課 隈部 浩市

〈記録者〉

南島原市教育委員会

生涯学習課 猿渡 忠敬

〈会場責任者〉

島原市教育委員会

社会教育課 古瀬 功明

【事例発表】

平成17年の市町村合併により雲仙市が誕生したととも

に、雲仙市子ども会と青少年健全育成協議会が設立されました。

当時はそれぞれの団体がジュニアリーダー研修や通学合宿、少年の主張など様々な事業を開催していましたが、年々少子化の影響により子どもたちもだんだん減っていく中で、会員数(世帯)も減少しており、両団体の存続が困難な状況でありました。

雲仙市では、もともと子どもの見守りを行っていた青少年協と、子どもの自主性を大切にしながら体験活動を行う子ども会とは性質としては少々違います。子どもが絡むという部分では同じであり、その部分を良い感じでサポートして持続可能なものにできないかということから、議論を何回も重ね、両団体を統合することで組織強化を図っていったという方向性が打ち出されました。

統合後の変化としまして、今まで二つあった団体が一つになることで一つのテーブルで意見交換や円滑に会議を進めることができるようになり会議の効率化につながりました。また、一つの団体となった事で今まで行っていた事業の廃止や拡充などの見直しをすることが出来ました。さらに、事業の見直しができたことにより、役員やスタッフとして参加する保護者の負担軽減につながりました。

そのほかにも、団体の統合とあわせて事務局の業務の集約も図ることができ、効率のよい協力体制がスムーズにとれるようになりました。今まで地域のつながりが希薄化していた地域が、一つの団体で事業を行うことで、地域住民の参加がしやすくなり、連携も深まり、充実した事業を実施することが出来ました。

したがって、今後も引き続き

き、雲仙市青少年子ども育成会議で、子どもを核とした地域課題の解決について地域全体で取り組みができるよう推進していきます。

【指導助言】

多世代多分野の人々や団体が子育てやまちづくりに関わるうえで必要なものを残し、 unnecessaryなものを削ぎ落とすことで、個人や団体が輝き、そのことによって人はつながり、また、地域には旗振り役は難しくても、協力することには積極的な人材は多い。その方々の得意なこと、好きなことをしてもらうことで関わる人が増え、活動の輪が広がっていくことになる。

先ほどの発表の内容にもありました「地域にある複数の団体を整備・統合していくこと」も私たち社会教育の今後の課題であります。

今後は、人づくり、つなが

りづくり、地域づくり、この三つが循環することによって、地域全体のウェルビーイングが実現できると考えております。

まさに今こそ、人を育み、人をつなぎ、地域を元気に幸せにできるのは皆様が取り組まれている社会教育の出番であり、今後子どもたちに残していく地域は私たち大人の責任だと思えますので、本日も発表頂いた雲仙市の取り組みを参考にさせていただき、各地域において、まずは第一歩を踏み出していただけたらと思っております。

しゃくなげは、「石南花」と書く。大きくて派手な花びらが特徴で気品ある美しさから「花木の女王」と呼ばれている。



花言葉は「威厳」「警戒」「危険」「荘厳」など。

山の奥地でしかみられない花、葉には毒があり簡単には近寄りたがたい花であるため「高嶺の花」という言葉の由来にもなった。